
Refrain my life

花壇ガーディアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Refrain my life

【Nコード】

N1622BA

【作者名】

花壇ガーディアン

【あらすじ】

あなたは、あなたが死ぬその瞬間、何を考えると思いますか？人は、突然その生涯を終える時、きつと後悔する事があるだろう。あれをしておけばよかった。これを伝えておけばよかった。時間はいくらあっても足りないから。残される者に、すべてを伝えるために。最後の瞬間を、もう一度生きて。もう一度生きて、やり残した事が無いように。

優しくも悲しい三日間のお話。

my lover 1 (前書き)

初投稿となります

pixivさんに投稿していた小説なのですが

もっかい別サイトに投げてみたら？

と言われてしまった……

ここに投下します

文才のない僕ですが

よろしく願います

December 18th

眠りから覚めると、薄くぼやけた視界は、白く染まっていた。この白は、私の部屋の天井の白。布団の白。そしてカーテンの白だ。そのカーテンの隙間から差し込む光は、まだ淡く、弱い。しかし弱いながらもはつきりと、命あるものに“朝”を知らせている。

布団にくるまったまま目覚まし時計を見ると、時間にはまだ余裕があるようだ。二度寝することを決めた直後、私の一番好きな曲が部屋中に鳴り響いた。寝起きのせいでそれに即座に反応することができず、しばらくその曲を聴いてから、もそもそと布団から這い出た。

その音の発信源である私のケータイを取る。着信画面には“俺様は神”と表示されているが、別に相手は神ではなく、私の友人。ヤツがふざけて勝手に登録したのだった。

「……もしもし」

『あ、ヒナ？起きてた、かな？』

眠さをなんとか堪えて電話に出ると、電話の向こうからは聞き慣れたムカつく声が聞こえてきた。

「いや、寝てた。誰かさんに起こされたんだよ」

『ああ、そりゃひどいやツだ。こんな時間に叩き起こすなんて、信じられないね』

こいつ、人を叩き起こしといて、悪びれる様子もないらしい。

「あー、そうそう。もうそんなヤツと話したくないからさ、ばいばい」

『あ、ちよい！ちよい待った！ごめんごめん！』

適当にあしらおうとすると、今度は慌てて引き止められた。

「最初から謝ればいいものを」

『ん、ごめーん、ね？』

「謝り方が気に入らない。今度こそ、じゃあな」

『あ、ちよっ、待つ……』

っー、っー、っー。

あの生意気な態度と鼻にかかる声に腹が立ち、電話を切ってケータイを放る。ケータイは、ぼふ、と布団に着地して、それはもう鳴ることはなかった。あのバカは、電話を諦めたのだろうか。

カーテンを開けて外を見ると、外は真っ白。雪景色に覆われた美しい街並み。なんてことはなく、せつかくの美しい雪も、泥にまみれて茶色く淀んだ色になっている。なんと風情のないことか。

カーテンの外をしばらく眺めて、私は今日の授業のことを考えていた。体育があるのだ。普段は苦手な体育だが、雪が積もっていれば体育は体育館での授業になるだろう。体育館の体育といえば、そう。バスケットだ。私の唯一の趣味、そして特技である、バスケットボール。

私の父親はプロバスケットプレイヤーで、地方のチームで活躍している、有名な選手だった。私もその血を色濃く受け継いだのか、幼いころからバスケットをして遊んでいた。小学校のミニバスチームから、中学校、高校とバスケットで毎年レギュラー入りしていた。

バスケットには自信がある。女子バスケットでは、誰と1on1をしても負けたことはないし、フリースロー対決も、リバウンドも、常に勝ち続けてきた。父もよく褒めてくれたが、私はそれが嫌だった。私は、父を超えたかったのだ。父を超えるバスケットプレイヤーになりたかったのだ。

父を超えるために、毎日練習をしていた。毎日五百本のシュート練習、三十分ハンドリング練習、三十分ドリブル練習、二時間以上の走り込みで体力も付けて、NBAの試合を見て研究もしてい

た。バスケに対して、あんなに真つ直ぐだったのに、必死だったのに、ついにその夢は叶う事がなかった。

父は半年前、母と共に事故で死んだのだった。

母とずっと仲良しだった父。母と二人で手をつないで買い物に行つてから、何時間経つても帰つてこない。心配して待っていると、家に警察から電話が来たのだった。“お父さんとお母さんが亡くなりました”、と。

病院に走った。無我夢中だった。私も、両親が大好きだったからいつも褒めてくれる、優しい父が好きだった。練習を見守ってくれる、優しい母が好きだった。バスケでは絶対に手を抜かない、厳しい父が好きだった。練習のしすぎで遅くなるときつく叱る、厳しい母が好きだった。

家からは遠い救急病院まで走っても、全く疲れなど感じなかった。バスケのために鍛えた体力が、こんなことの役に立つなんて思わなかった。

冷たくなった母と父の体が並んでいる姿は悲惨だった。猛スピードで突っ込んできたスポーツカーにぶつかり、二人とも、腰から下が切断されていたから。お父さん、これじゃバスケができなくなってしまう。お母さん、これじゃ一緒に買い物に行けなくなってしまう。私はあの時そう思った。

それから、私は親戚に頼らず一人で生きていくことにした。よく母の家事を手伝っていたし、大体のことは一人でできる。両親を失ったショックから立ち直るのには時間を要したが、最近ではすっかり気持ちも落ち着き、今もこうして生きている。

しばらくしてバスケ部も引退し、バスケができない日が続いた。こうして最近バスケに飢えた毎日を送っている。というわけで、回想もほどほどに、私は今日の体育が楽しみなわけだ。

「…………ふわあ…………っ」

一つ欠伸をすると、学校に行くために、その辺に放り投げてあった制服を着る。ろくに使いもしない勉強道具を鞆に詰めて、ケータ

イをポケットに入れた。洗面所で顔を洗って、眠気眼の自分を鏡で見た。仏頂面は、父譲り。ここは母に似た笑顔の素敵な女の子がよかった。背が低いのは母譲り。ここは父に似た高身長がよかった。いいとこ取りなんてことはできないわけか。

玄関に掛けてあるコートを着て、マフラーを巻く。ここところはマフラーがないと寒くてやってられないから、この安っぽい、毛玉だらけのマフラーにも助けられている。革靴を履いて、玄関にあるバツシュを袋に入れて、通学鞆と一緒に持った。玄関の鍵を開け、ドアを開けると、

「やあ、ヒナ？おはよう」

目の前にいたのは、爽やかな短髪（見ているだけで寒い）に長身（憎たらしい限り）の、眼鏡をかけた男だった。こいつが紛れもなく先ほどの電話の主であり、私の唯一の友人。こいつには本当に世話になっっているのだが、この男、なにせ遠慮が足りない。先ほどのように電話で叩き起されたり、気がつくときと家の中にいて、ご飯を作っていたりもする。洗濯物を勝手に畳んでいたときにはさすがに引いたが、どうやらこいつなりに、一人暮らしの私を手伝ってくれているらしい。気持ちは嬉しいのだが、こいつ、気持ちは悪いんだ。

「……ストーカーだな、まるで」

「いやあ、否定できないかも？」

「ならやめてくれ。気持ちは悪い」

「あはは。照れちゃって」

こいつのこの、にやにやとしたいやらしい笑顔。本当に腹立たしいことこの上ない。

「あのなあ。おまえ、さっさと学校行けよ」

「ん、ヒナも今家を出るところだったんじゃないの？一緒に」

「おまえと一緒にには行かないからな」

「ありや、つれないなあ」

さっさと横を通り抜けて、私は学校に向けて歩き始めた。こいつも私の後ろをついてきて話しかけてくるが、無視を決め込んでやる。

こいつは何故かいつも私の家までやってきて、私に付きまとうのだ。
「ね、今日の体育、一緒にバスケしようよ?」

「……………」
「ほら、久々のバスケじゃない?楽しみだなあ」

「……………」

「あれ、バスケしたくないの」
しつこく懲りなく話しかけてくるが、本当にうざったいことこの上ない。勝手に隣を歩いてくるし、こいつは背が高くて足が長いから、背の低い、歩きの遅い私に合わせてゆっくりと歩いている。さつさといけばいいのに。

私は返事もしないし顔も見もしないのに、こいつは私の隣でぺらぺらと喋っている。耳障りな鼻にかかる声で、私に語りかけている。
「ああ、早くバスケしたいなあ」

バスケなら、私だつてしたいっつーの。

「ヒナ、無視はよくないようん」
ここで初めて、悲しそうにそう呟くので、とりあえず顔だけ向けてやった。こいつはそれを見て、希望に満ち溢れた笑顔を浮かべた。相変わらず気持ち悪い笑顔だが、確かに私に微笑みかけていた。何故こいつは、こんなに私に執着するのだろうか。幼馴染だからだろうか。

「バスケしよう、ね?」

「うるさいな。わかったよ」

「やった。決まり、だね」

結局こいつは私の隣を歩き続け、学校に到着した。こいつとはクラスが違うのだが、なんと運が悪いことに体育の授業は二クラス合同で行うのだ。楽しみにしていた体育の授業も、なんだか嫌な授業になりそうだ。

mylover 2 (前書き)

続けて3話まで投げます。

放課後。机に突っ伏して寝ていた私は、鼻にかかる耳障りな声で目を覚ました。普段、授業中はほとんど爆睡をかましているので、放課後、誰かに起こされて帰宅することが多いのだが、今回はたまそれがこいつだったただけの話。しかし、どうも気に入らない。こいつだからか。

「ヒナ、帰るよ?」

結局、今日の体育の授業もバスケじゃなかったし。つまらない一日だった。

「うっさいな……勝手に帰れよ」

「そう言われてもさ。掃除の邪魔になってるよ?」

「……あ」

言われて気付くと、両手で箒をもって立っている、おさげの女の子がいる。彼女はこっちを見て、申し訳なさそうに笑っていた。

私は、掃除当番の仕事の邪魔をしていたようだ。迷惑をかけてしまったて申し訳ない。

「あ、急がなくていいからさ」

慌てて帰宅する準備をする私を見て、彼女は気を遣ってそう言ったが、実際、私が彼女の立場だったら、邪魔で仕方ないだろうな、と思った。しかしなんだろう。この彼女がまとう“不憫”オーラ、というか……。いや、オーラ、なんて言ったが、別にテレビに出ていた金髪のバケモノに用はない。ただそんな雰囲気、彼女を包んでいた、というだけの話。

私が悪いのに、何故謝られたのだろうか。気を遣っているのはそ
ちだろつに　　というか。この子の名前は……なんだつたつけ？
一緒のクラスではあるが、いかんせん他人と話をしないものだから、
人の名前とかそんなものはよく覚えていないのだ。

「それじゃあね、マキちゃん」

あ、そうだ、マキちゃんだった。そして、このバカ男は、レイ、
と呼ばれている。私も、どうしても必要な時はその呼び名で呼ぶ。

といつても、私からこいつに用があることなんて、ほとんどな
いのだが。

愛想笑いの下手な、不憫な女の子、マキと別れ、私は家路に就く。
せつかく持ってきたバスシュも下駄箱に置いたままで、日の目を浴
びることはなかった。

「バスケ、できなかつたね」

と、私が考えていたことを見透かしているかのように、レイは私
に話しかけた。というか、またついてきていたのか。

「そうだな」

答えるのも面倒くさかつたのでそう適当に返すと、レイは自分の
バスシュを持って、またにやにや笑っている。

「部活、見に行こうよ」

彼も元々は男子バスケ部員で、部長を務めていた。男バスと女バ
スはよく合同練習をしていたため、何度か練習試合もしたが、こい
つはかなり優秀なセンターだ。スモールフォワードの私は、よくシ
ョットを弾かれたのでよく覚えている。

私もこいつも部活が大好きだったので、別にこれから後輩たちに混
ざって部活動をして怒られないと思う。

「……それは、いいかもな」

「決まりだね。部活、行こうか」

たまにはいいこと言うじゃん。

二人で体育館に向かって歩いてみると、歩きながら、レイは何故
か深刻そうな顔をしていた。どうした気持ち悪い、と思っても言わ

ずっていたのだが、

「ねえ、ヒナ？」

レイのほうから話しかけてきた。

「なんだよ気持ち悪い」

「気持ち悪いかな？」

「ああ」

「そっか。なんとかしたほうがいいかな」

やっと気づいたのか？

「……って、本題はそこじゃなくて、マキちゃんだけだよ。」

…どうして一人で掃除してたんだろっかね？ヒナのクラスって、掃除

は四人で組んでなかったっけ？」

「四人？ああ、そういえばそうだったな」

言われてみればそうだ。私も普段は、名前もわからないようなや

つらと四人で掃除をしている。マキちゃんの他のメンバーも誰だか

知らないが、一体何故一人で掃除をしていたのだろうか。

「今日の掃除当番は、堀田、脇田、瀬能、マキちゃんの四人のはず

だね。あの三人、サボってるな」

「なんでわかるんだ」

「なんでって。ヒナのクラスのことだもん。なんでも知ってるよ？」

本格的ににストーカーじみてきたな。

「で、私はその三人、知らないんだけど。どんな連中だよ？」

「んーとき、サッカー部のチンピラどもだよ。わかんないかな？つ

いこないだまで、煙草吸って停学になってたんだけど……覚えてな

いかな？」

ああ、そういえば聞いたことがあるかもしれない。クラスから停

学者が出て、机が三つ空席になっていたことも、辛うじて覚えてい

る。そいつらが、掃除をマキちゃんに押し付けているということか。

「そいつらのせいかな。かわいそうに」

「まっただよねえ。ひどい連中だよ」

レイも頷き、笑顔も作らなくなった。こいつがにやにや笑いをや

めたときは、大体の場合、考え事をしているのだ。レイも表情には出さないが、かなり怒っているようだった。私だっという気持ちではない。内気そうな女の子に掃除を任せて、そいつらは今頃遊び呆けているのだろうと思うと、腹が立って仕方ない。

堀田、脇田、瀬能。その三人の名前が、珍しく私の脳裏に焼きついた。

mylover 3 (前書き)

今日の所はここまで投下です。

きゅっ、ぐっ……ぱすっ。

バッシュが床と擦れるスキル音。ショットを打つのに腕にかかる重み、おしてボールがネットをすり抜ける音。久しく聞くことになかった音、バスケットのために全身を動かす快感。それらに酔いしれ、私の体は疲れを知らずに動き続けていた。

あれから私とレイは二人で部活に参加して、私たちはそれぞれ別々に、久しぶりのバスケットを楽しんだのだ。練習試合などでいい汗をかいて、やがて生徒の下校時刻となった。そこで後輩たちは散り散りに帰っていったが、私は一人でシュート練習を続けている。いつの間にかレイもいなくなっていたのだが、おそらく、かわいい後輩たちと一緒に帰ったのだろう。

時刻は八時を回り、私はさすがに練習を中断した。ボールを片づけて、体育館の電気を全て消灯、鍵も閉めて体育館を後にした。

電気のない夜の学校は、妙に恐怖感を煽る。非常灯の緑の光だけが頼りの廊下を慎重に歩いていく。曲がり角を曲がって職員室が目に入った。ふう、と息をつき、光を見ると安心するのは人間らしいな、なんて思った。そのまま光が漏れている職員室に向かっていくと、

「……わっ!!」

「きゃあっ!?!」

物陰から何者かに突然抱きつかれ、柄にもない女々しい声を出してしまう。

その何者かを見ると、長身の、髪の短い、にやにやと笑う男だった。薄暗い廊下だが、それはもうはつきりと目に映った。

「……へへー、ヒナ、びっくりし
ばきつ。」

「ああ、もう、びっくりしたじゃないか！」

ムカつく！心臓が口から出るかと思った！

私を驚かせたこの男をグーでさんざん殴る。

「痛い！ヒナ痛い！」

「うっさい！ここで寝てろっ！」

満足するまでレイを殴ると、体を丸めて悲しそうに横たわるレイを放置して、息も荒く職員室に向かった。

職員室のドアを乱暴に開けると、煙草の匂いが充満した部屋の中に一人、パソコンを凝視しながら作業をしている女性がいた。彼女は女子バスケット部の顧問で、独身のアラフォー。職員室は当然禁煙なのだが、先生はヘビースモーカーなので、煙草がなければやってられないらしい。机の灰皿には、大量の煙草が山を作っていた。

「おお、ヒナか。お疲れさん」

気だるそうな眼をこっちに向けて、軽く手を挙げる。私は先生に小さく会釈し、机の上に体育館の鍵を置いた。

「いつもありがとうございます、先生」

先生は、バスケットに飢えた私に練習時間を提供してくれる。先生は私の家庭の事情や、バスケットに対する情熱を理解してくれている。それに甘えて毎日、というのも先生に申し訳ないので自重しているが、できるものなら何時間でも、何日でも練習をしたいのだ。先生はその間ずっと職員室で残業をしているが、この面倒くさがりの無精な先生が、一体何の仕事をしているのかはわからない。それこそゲームでもしているのではないだろうか。

「あ、そうだヒナ。レイのやつと会わなかったのか？」

「ああ、さっきそこで。そろそろ力尽きてる頃だと思えますよ」

「……はあ？」

いきなり背後から抱きつかれた、と簡潔に説明すると、先生はわっはつはと大声で笑いながら、啜えた煙草に火を点けた。

「ヒナ、そりやおまえ、あいつだって男だ。男は皆ケモノなんだからな」

「そりやそうかもしれないけど、だったら他の女が何人だっているじゃないですか。あいつ、あんな気持ち悪いのにモテるんだし。女って生き物の神経がわかりません」

そう、レイは異様にモテるのだ。あの気持ち悪い声、顔、態度。あれが他の女子の目にかかれば、“かっこいい”らしいのだ。中には勇気を出してレイに告白する者もいるらしい。しかしレイはことごとくそれを断っているとか。

理由は知らないし、レイから直接聞いたわけではない。ただ、レイの友人である私に、レイのことを訊いてくる女子が多くて、こっちも迷惑しているのだ。

「おまえだって女だろう。レイのやつ、かっこいいとか思わないのか？」

「あんなの、どこが！」

「その割にお前、いつもレイと一緒にいるじゃないか」

「あいつがストーカーみたいについてくるんです！私のことなんでも知ってるみたいな素振りで、気持ち悪いっつらないです」

「でも、気持ち悪いにしてもだ。……認めてるじゃないか。バスケットプレイヤーとしても、友達としても」

言われてみれば、そうだ。あんなに気持ち悪くても、あいつは“友達”なのだ。いや、友達どころの話ではない。幼馴染であり、私のことを誰よりも理解してくれている。そして、友達である私のことを大切に思ってくれているんだ。

「……はい。確かにあいつは、私の友達です。いいバスケットプレイヤーです。私の幼馴染です」

「……へえ？じゃあさ、あいつがなんで、他の人からの告白を断ってるんだらうな？しかも、おまえに隠して、だ。あんな飢えたケモ

ノが、新鮮な女を目の前に必死に堪えてる理由って、一体何なんだろうな？」

「そんなこと、聞かれても……」

「まあ、考えるこつたね。ヒナは人見知りもするし、自分に素直になれてない。おまえにはまだ、他人の気持ちを考える余裕がないのかもしれない。だから、自分の気持ちもわからないんじゃないか」

先生は私にそう言うと、パソコンの席から離れて、マグカップを持って給湯室に向かった。

「今日はもう帰りな。外は真つ暗だ。おまえに何かあったら、私は責任とれないからな」

煙草に混ざつてコーヒーの匂いがする。今からコーヒーを淹れるなんて、まだ仕事をするつもりなのだろうか。

「あ、はい。失礼、しました」

「ん。気をつけるんだぞ」

職員室から出て、先生に言われた言葉が頭の中を掻き回す。

私の気持ちなんて、私が一番よくわかっている。それなのになんだ。まるでレイのことを、私が邪魔しているみたいじゃないか。

そんなの知るか、私は、レイじゃない。私は、私なんだ……。

私は自分にそう言い聞かせて、家路に就いた。その道中、珍しくレイはついてこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1622ba/>

Refrain my life

2012年1月4日02時52分発行